

「終のすみか」

登場人物

能美正市 (53)	—のうみまさいち—	能美家主人
能美正仁 (28)	—のうみまさひと—	長男 (正市の連れ子)
勝俣美智 (28)	—かつまたみち—	正仁の連れ
谷木哲人 (27)	—やぎてつと—	正仁たちのボランティア仲間
安田蓮 (33)	—やすだれん—	同居する女性
相本理紗 (28)	—あいもとりさ—	長女 (妻の連れ子)
相本輝実 (29)	—あいもとてるみ—	理紗の夫
小椋環子 (25)	—おぐらたまこ—	康子の娘
小椋康子 (60)	—おぐらやすこ—	正市の姉
石井士門 (37)	—いしいしもん—	正市の昔の部下

東日本を襲った大きな地震災害から一年余りが経つ、梅雨入り前の時期。埼玉県のはずれの古ぼけた町。

昭和の香りのする10畳ほどの居間が、壁に遮られずに客席から見通せる囲み舞台。

古さのせいか建てつけのせいか、風が吹いたりするとガタガタと壁や窓がきしむ音がする。

カーペット敷きの中央にテーブル、椅子が2脚、隅にソファ、本や雑誌が入ったカラーボックス、古いブラウン管テレビなど。簡素な印象。

奥の玉のれんのかかった出入口を出ると、台所、そして他の部屋やトイレへ通じる廊下。部屋から台所の様子は窺えない。

その両脇にのみ壁があり、ジャツキーチェンの昔のポスター。

反対側は縁側になっていて、小さな庭スペースへと出られる。小ぶりの鉢植えが二つほど。

いわゆる成長期に建てられた一軒家が、少しでも自宅の充実を図って設けたような小さな小さな庭。

玄関を通らずとも直接敷地内に入ってこられ、俳優は能舞台の橋掛かりのように劇場の客席を横切って庭に現れる。

ときおり遠くから、ガタンゴトンと電車の走る音が聴こえてくる。

1.

暗転の中、黒電話の鳴る音。その音が切れると同時に明転。

明かりが入ると、能美正仁がソファに座っていて、谷木哲人がのれんをくぐって入ってくる。  
よく晴れた夕方近く。場の進行につれて日が落ちていき、徐々に夕景の赤みが強まっていく。

正仁 分かったか？  
哲人 うん。女川のキャンプでも思ったけどさ、なんか和式便所でもはや新鮮ですらあるよね。洋式が当たり前になっちゃって。  
正仁 来て早々よくうんこできるな。  
哲人 だって緊張してるし。  
正仁 緊張するとうんこすんのか？  
哲人 するでしょ。するよね。  
正仁 ……  
哲人 電話鳴ってたよね。  
正仁 鳴ってたな。  
哲人 いいの？出なくて。  
正仁 なんで俺が出るんだよ。  
哲人 正仁くんの家でしょ。  
正仁 (笑って) 俺ん家つつたつてさ。違うんじゃないの、もはや。  
哲人 1年くらいならいいじゃん。  
正仁 1年？  
哲人 あれ？1年ぶりでしょ。  
正仁 なんてだよ。  
哲人 1年だったよね？結局。ん？今6月だもんね。  
正仁 (笑って) 自分がみたいに云ってんなよ。お前は1クールちよいくらいだろ。  
哲人 何云っちゃってんの。3クール近くだよ。  
正仁 え？マジか？  
哲人 11月だもん、俺。がれきとか泥かきに回る前は炊き出しとか運搬のほうもやってたし。  
正仁 あ、どんだん人が減ってた頃か？寒くなってきた。  
哲人 そうだよ、救世主だよ、俺。スーパーバイプレイヤー。  
正仁 ……ってか、別にここから女川行ったんじゃないからな、俺。  
哲人 あ、そうなの？  
正仁 いつ以来だっけな…。(まじまじと見回す)  
哲人 (同じく見て)…。  
正仁 軽くもう10年か。  
哲人 10年！？…って、え、実家来たのが？

正仁 (笑って) びびるくらい何んも変わっちゃいないんだけど、ここ。  
哲人 何ていうか、時間止まってる感あるよね、ここ。  
正仁 あ、いや、もう10年以上か。  
哲人 10年以上!?  
正仁 高校やめてすぐだったしな、出たの。  
哲人 え、そんなにぶりなの?  
正仁 よくもったよな、こんなボロい家。  
哲人 …あ、地震?  
正仁 正直ぶっ壊れてなくなってんじやねえのってマジで思ったし。  
哲人 えーあつてよかったじゃん。埼玉もかなり揺れたんだよね?  
正仁 (笑って) よかったっつうんかな。  
哲人 よく連れてきたよね。俺ら路頭に迷うとこじゃない。  
正仁 そこかよ。  
携帯の着信音。  
正仁、手に取って見る。  
哲人 電話?  
正仁 まだだ…。迷惑メールだよ。  
哲人 何て?  
正仁 初めまして、あみですだって。  
哲人 一応返信しといたら。  
正仁 なんてだよ。…たく、何回も何回も。  
哲人 出会いほしいけどね。  
正仁 おっさんとかだぞ、きつと。これ送ってんの。  
哲人 え? っていうか、高校やめたの? 正仁くん。  
正仁 (笑って) …自由だな、お前。  
哲人 何が?  
正仁 っつか、前に云ったよな、やめたって。  
哲人 あ、聞いた?  
正仁 云ったな、かなり初期に。  
哲人 聞いたか。聞いたね。  
正仁 お前、リアクションだけでかいんだよ、いちいち。  
哲人 そこは命かけてるから。  
正仁 (笑って) もっと他にかけるとこあるだろ、なんか。  
哲人 そんなことないよ。リアクション重要。女なんかリアクション次第でしょ。  
正仁 どういう理論だよ。  
哲人 金と見た目以外としたらリアクションだよ。自分のことこそこイケてると思っ

てる女はさ、自分愛が強すぎて、何だったらそれ全部ほしがるけどね。私だったら当然くらいの頭になっちゃってるから。

正仁 …。(笑う)

哲人 でもブサイクはブサイクでややこしいけどね。大事にしてもらったことなんてないでしょ。万が一やさしくとかされても、もはや信用できなくなっちゃってるから逆にめんどくさいの。

正仁 病んでんな、お前は。

哲人 真理だよ、これ。

正仁 でも哲こそが相当心ないけどな。ちよいちよい。

哲人 え？そんなことないって！尊敬する人、上島だよ。

正仁 上島？

哲人 上島竜平。

正仁 …ダチヨウ倶楽部？

哲人 そう。

正仁 尊敬する人？

哲人 すごいでしょ、あの才能って。志村からダウンタウンから全方位的に可愛がられて必要とされてるんだから。不可欠な存在だよ。心なかつたらああはならないでしょ。

ガタンゴトン…。

正仁 (笑って)…何の話してたんだっけ？

哲人 何だっけ？

正仁 (見回して)…ま、だからさ、もはや浦島って感じだよな、俺は。

哲人 浦島？誰？

正仁 誰って浦島太郎だよ。

哲人 誰の話？芸人？

正仁 なんて芸人なんだよ、浦島太郎が。

哲人 上島絡みじゃなくて？

正仁 絡んでない、ダチヨウとは。いっさい。

哲人 え？

正仁 …知んないの？哲。浦島太郎。

哲人 知らない。

正仁 嘘だろ。聞いたよな？子供の時とか。昔話。

哲人 有名人？

正仁 (笑って)俺とそんな歳変わんないだろ。

哲人 27。まだアラサー手前。

正仁 どんな子供時代だったんだよ、お前。

哲人 そんなの消え去ってるから。俺の中で。

正仁 …深いよ、闇が。お前。(笑う)

と、また奥で電話が鳴る。

哲人 …鳴ってるよ。

正仁 分かってるよ。

哲人 出ないの？

正仁 だからなんで俺が出るんだよ。

哲人 だって正仁くんの家じゃん。

正仁 もういいよ、このくんだり。

哲人 あ、お父さんいたよね？(奥を窺う)

正仁 …さあ。

哲人 さあ？…お父さんでしょ？俺ら会った人。

正仁 (笑って) 俺に訊くなよ。

哲人 誰に訊くの？

正仁 誰にも訊くなよ。

哲人 …え？ここ正仁くんの家だよ？そもそも。

正仁 …。

哲人 え？じゃなかったら俺らがこうやってここで喋ってること自体がって話になってこない？

電話の音が切れる。

哲人 え？ものすごい根本的な疑問が出てきちゃったんだけど。誰の家？ここ。ただの不法侵入じゃん。

正仁 (笑って) 似たようなもんなんじゃないの。

哲人 えー！俺、知らない人の家でうんこしたの？

正仁 うるさいな。いちいちリアクションでかいんだよ。

哲人 リアクションじゃないよ。これは素。

勝俣美智、庭へ入ってくる。

妊娠している。

哲人 あ、みっちゃん、どこ行ってたの。

美智 うん、その辺見た。

正仁 …その辺？

哲人 ねえ、すごいことが発覚したんだけど。

美智 何？

哲人 ここ正仁くんの家じゃないんだって。

美智 は？

正仁 (同時に) え。

哲人 浦島さんって人の家。

美智 浦島？

哲人 そう。

美智 誰？浦島さんって。

哲人 知らないよ、俺だって。

美智 何を云うてんの？哲人。

哲人 だって云ったもん、正仁くんが。

正仁 云ってねえよ。

哲人 うんこしたんだよ、俺。知らない人の家で。

美智 ご挨拶したやん、お父さんに。私ら。

哲人 そもそもあれが誰なのかって話になってて。

正仁 なってねえよ。

美智 (笑って)意味分からん。

哲人 やっぱり真っ昼間からいるのとかおかしいと思ったの。正仁くん、女川でもそうだったじゃん。撤去で行ってた家に上り込んで、普通に2、3日泊まりこんじやったりしてキャンプに帰ってこなくなったりさ。そういうところあるでしょ。ありえるでしょ。

美智 コックさんやからちやうの？

哲人 コックさん？

美智 そうなんやろ？お父さん。

正仁 …まあ一応な。

哲人 知らなかったんだけど…。

美智 夕方から出勤とかなんちやうの。

哲人 えー聞いてないよー！聞いてない聞いてない。

正仁 (笑って)なんでそこそんなリアクションなんだよ。

哲人 そこハブなの？

美智 ハブとかちやうやん。

正仁 大げさなんだよ、上島。

美智 上島？

哲人 三人の絆つてのがあるでしょ。

美智 何なん？浦島さんとか上島さんとか、知らん登場人物がぎょうさん出てきて訳分からん。

哲人 整理しよか。

正仁 お前が云うな。

美智 そもそもさ、表札ちゃんと能美だったやん。

哲人 あ、正仁くんね、もう10年以上帰ってなかったんだって、ここに。

美智 …うん。  
哲人 え、知ってたの？みっちゃん。  
美智 そんなあるやんか。  
哲人 そんな危ういところによく俺らを連れてきたよね。  
正仁 云つとくけどさ、こんなかび臭いとこ今さらって感じだからな、俺だって。しよ  
うがなくだぞ。美智も哲も行くところないって云うからよ。  
美智 …。  
          また携帯の着信音。  
正仁 何だよ、ったく…。(見る)  
哲人 何？  
正仁 100億円融資するって。新宿の母から。  
哲人 いいじゃん。もらつといたら。  
正仁 お前、最高のターゲットだな。  
哲人 あ。じゃあさ、やっぱりみっちゃんのとこ行かない？  
美智 は？  
哲人 俺、大阪行ったことないんだよね。食い倒れたいじゃん。  
正仁 完全に観光のつもりじゃねえか、お前。  
美智 …云ったでしょ。行かへんって。  
哲人 子供もできたんだしさ。行かないと、そこはやっぱり。俺も一緒に行くから。  
正仁 お前は誰なんだよ。  
哲人 ね、この後。大阪。  
美智 無理。  
哲人 ここら辺、あまりにも何にもないしさ。埼玉ってこんなだと思わなかったよ。  
美智 いいところやんか、ここ。  
哲人 え、そう？  
美智 静かやし。駅からも近いし。  
哲人 そういうレベルじゃないよね。駅たってマックもないじゃん。聞いたことない  
コンビニが一軒だけだもん。焦ったよ、おばあちゃんが一人でやってるってさ。  
          駄菓子屋だよ。  
正仁 なんかお前に云われるとムカつくな。  
美智 何贅沢云うてんの。そんなん云うてられへんかったでしょ。  
哲人 そうだけど。  
美智 一人で行ったらええやん、哲人。大阪。  
哲人 え？  
正仁 そうだな。一人で行けよ、そんなに行きたいんだったら。  
哲人 そういうことじゃないでしょ。三人でって話だよな。

美智 行きたいんやろ。

哲人 なんで気がついたら2対1の構図になってるの？

正仁 だいたいお前も一緒に来てくれなんて頼んでないからな、そもそも。

哲人 え、え？おかしいおかしい。うちの絆があるよね？女川銭湯ツアーも行ったじゃない。

美智 哲人も実家くらいあるでしょ。

哲人 だからそんなの無いんだって。消え去ったんだから。

美智 消え去ったって何や。

哲人 うわ！そういうのって。パワハラになるんだよ。パワハラ。

正仁 パワハラじゃねえよ。

哲人 何だったらお腹の子入れて、3対1みたいなことになってるじゃん。…あーなんかお腹痛くなってきた…。(立ち上がって) うんこしてくる。

正仁 (笑って) さっきしたじゃねえか。

哲人 デリケートなんだからさ。(奥へ行こうとしてふと不安に) …え、大丈夫なんだよね？うんこして。

正仁 いつまで云ってんだよ。

哲人 ショックがデカいんだって。(奥へ)

正仁 ガタガタ、ガタガタ…。

正仁 何回行くんだよ、あいつ。(笑う)

美智 …。

正仁 …どうした？

美智 何が？

正仁 いや、急にさ。いなくなったから。

美智 せやから見てたの、この辺り。

正仁 見てたって…。畑ばっかで何んもないだろ。年がら年中ネギの臭いしかしいんだぞ。

美智 お寺さんがあったよ。そこ出てちよつと行ったとこ。ちゃんとしとった。お守りとかおみくじも売ってんの。

正仁 ああ。(笑って) …え、お寺なんて興味あったっけ？お詣りとかしちゃうの？

美智 信じとるよ、神さん。っていうよりね、祈るって行為が好きなんよ、私。願うことがあるのって幸せなことやんか。

正仁 (笑って) 金髪真っキンキンで宮城に現れた奴が？

美智 (笑って) いつの話や。

正仁 あ、変なおっさんいなかったか？

美智 おっさん？…いてなかったけど。

正仁 ガキの頃いたんだよ、いつもあそこに。なんだよおじさんって。



美智 (笑って) 何?なんだよおじさんって。

正仁 一年中さ、同じヨレヨレのTシャツと破れたズボン履いてあの辺フラフラしてんの。別に向こうからは何もしてこないんだけど、こっちはガキじゃん?気になるんだよな。近づいてったら、なんだよ〜なんだよ〜って。(笑って) めちゃくちゃ怖いの。

美智 近づいてくからやんか。

正仁 そこはガキだからさ、スルーできないじゃん。どう考えても絶対働いてないし、俺らのあいだでは、なんだよおじさんほうんこ食って生きてるって話になってさ。(笑って) うんこ食ってうんこして、それ食ってまたうんこして。一人食物連鎖。鎖。

美智 (笑って) そんなわけないやん。

正仁 そう思ってたんだよ、本気で。…もう死んじまったのかな。たぶん結構いい歳だったからな。

ガタンゴトン…。

美智 あ。ね、実家って字ってさ、実の家っていうのと、実は家ってのやと意味が全然変わる思わへん?

正仁 …。(笑う)

美智 …どうするつもりなん? 正くんは。

正仁 どうするって?

美智 ここ。

正仁 ここ?…え、浦島さん家じゃないぞ。

美智 (笑って) 分かってるよ。そうじゃなくて。ご厄介になるわけやんか。

正仁 …別に。考えてないけど。

美智 …私さ、昔からこんなとこに住むんが憧れやったの。

正仁 は?

美智 ごちやごちやしてへんし、のどかで。

正仁 (笑って) 美智、勘違いしてないか。隣の市なんて過疎指定されてんだぞ。

美智 ネギ好きやし、私。

正仁 え? ちょっと待って待って。なんか美智らしくないっつうか。

美智 私らしい?…私らしいってどんなん?

正仁 …。

美智 (笑って) あ、ごめん。うっとうしいこと云いたいんちゃうよ。私は働かれへんから。考えんと、子供のこともね。やっぱり。

正仁 …心配すんなって。

美智 心配?…私、してると思う?

正仁 人生なんてさ、バカラなんだから。

美智 …またカジノの話？

正仁 そうだよ、バカラと一緒に。そんな複雑なものじゃないんだって。プレイヤー、バンカー、プレイヤー、バンカー。二つに一つでさ、一か八か、自分がどっちに張るかだけなんだから。

ガタガタ、ガタガタ…。

美智 …あのさ、今何ヶ月やと思う？

正仁 え？

美智 子供。

正仁 …3ヶ月。…あ。4ヶ月？

美智 もう来週には5ヶ月目。

正仁 それは何？

美智 お父さん、分かったかな？私のお腹。

正仁 …分かんたら、見たら。

美智 正くんの子だって、やで。

正仁 どうだろな。(笑って) 興味ないんじゃないの？急に現れて、ただでさえ迷惑がっ  
てんだろうし。

ガタンゴトン…。

美智 (奥を窺って) ここってお父さんだけなん？

正仁 え？

美智 今。

正仁 なんて？

美智 お母さんは？

正仁 …え？

美智 どないしてはるか知ってるの？今。

正仁 (笑って) お母さんって何だよ。

美智 ずっと会ってないんでしょ。

正仁 っつか、どの女のこと云ってんの？…産むだけ産んでどっかいなくなった女のこ  
とか？顔も知らないんだぞ、俺。

美智 …私が云ったのは、正くんと一緒に暮らしてたお母さんやったんだけど。

正仁 (笑って) ったく、何人ガキがほしいんだよって話だよな、あの種馬親父は。他  
にもいるんじゃないかねえの、絶対。

美智 …うん。お姉さんもおったんでしょ。

正仁 …姉だか何だか知らないけどさ。そもそも他人だしな、もともとが。(笑って) 勝  
手にコブつき同士がくっついて急に兄妹ができたとかむちゃくちゃ云われて、ま  
た知らないうちに勝手に別れて出てって。よくやるよ。こっちは何のこっちゃっ  
て話だろ。…今はもう笑えるけどさ。コントだよ。哲だったら「聞いてないよー」

美智 　　…。

美智

正仁 　　え、連絡しろって云ってんのか？

美智 　　ちゃうよ。ちょっと思っただけやから。

正仁 　　思った？

　　ガタガタ、ガタガタ…。

美智 　　…ここで育てるってどうなんやろ？…って思っ

正仁 　　え？

美智 　　ここいいとこやから。ここにはいられへんの？

正仁 　　…。

　　小椋康子、庭に入ってくる。手に新聞を持っている。

康子 　　あら。こんにちは。

美智 　　(康子を見て)…こんにちは。

康子 　　どちらさまかしら。

美智 　　あの…。すいません、お邪魔して。勝俣といいます。

康子 　　(深々と)初めまして。小椋です。

美智 　　(さらに深々と)…初めまして。

康子 　　珍しいですね、お客さまなんて。蓮さんのお友達ですか？

美智 　　はい？

康子 　　(正仁を見て)あら、こんにちは。

正仁 　　…どうも。

康子 　　正市はいます？

正仁 　　…。

美智 　　正市さんいうんは…。ここなの？

康子 　　ええ、この家の正市です。

　　哲人、戻ってくる。

美智 　　あ。たぶん今奥に。

康子 　　たぶん？

正仁 　　あ…。

哲人 　　…正仁くん、ちよつといい？

正仁 　　(康子に)おばさん？

哲人 　　え、おばさんって。

正仁 　　おばさんですか？

康子 　　…正ちゃん？

正仁 　　やっぱ…。おばさんですよ。お久しぶりです。

康子 　　正ちゃんなんですか。あらあら。正市もずっと何も云わないもんですから。

正仁 …連絡取ってなかったし。(笑う)  
康子 どうしてたんですか？ずっと。  
正仁 どうしてたってか、いろいろ…。しばらく宮城のほうに行つてて。  
康子 宮城に？  
正仁 ボランティアで。一応。  
康子 あらあら。力を合わせて助け合つていけないといけませんものね、こういう世の中ですから。  
正仁 …。  
康子 私も嬉しいです。正市も苦勞して若い時にこの家建てましたけど、でも貧乏してもその甲斐もあつたつてことです。  
哲人 …ねえ正仁くん。  
正仁 え？  
哲人 いいかな？便所がさ…。  
正仁 何だよ。待てつて。  
康子 お二人は？お友達ですか？  
正仁 あ、向こうで知り合つて一緒に。  
康子 正ちゃんがお世話になってます。私、伯母なんですよ。  
美智 伯母さん。  
康子 正市の姉です。この近くに住んでいて。  
正仁 え？こつち引越したんですか？たしか川崎のほうかなんかに。  
康子 ええ、今はこのすぐ近くなんですよ。家族はそばにいないといけませんからね。  
正仁 じゃあおじさんとかみんなどこつちに。  
康子 …いえ、今はあの子と私だけなんですよ。  
正仁 …おばさん、なんかちよつと変わったんじゃないですか？  
康子 私が？  
正仁 なんかも雰囲気っていうか…。  
康子 (笑つて) 歳取りましたから。正ちゃんこそ見違えました。立派になつちやつたので。  
哲人 ねえ、正仁くん…。  
正仁 何だよ。  
          安田蓮、のれんをくぐつて入つてくる。  
          ガタンゴトン…。  
蓮 …あの、みなさんは…。  
康子 蓮さん、おかえりなさい。  
蓮 あ。こんにちは、お姉さん。  
正仁 …おかえりなさい？

康子 パートですか？

蓮 はい。(一同の視線に) …みなさんは？

正仁 …誰？

蓮 あの…。安田です。(頭を下げる)

康子 蓮さんの家族みたいなものですよ。

蓮 はい？

康子 正市の息子さん。正仁さん。

蓮 え？(まじまじと正仁を見て) …こちらでお世話になってます、私。…今。

正仁 は？

哲人 (同時に) え、若いですよね？

蓮 はい？

正仁 (笑って) 何？何？どういうこと？何云ってんの？

蓮 (康子に) …あの、正市さんは？

康子 奥にいるらしいんですよ。

蓮 …ごめんなさい。じゃあ、ちょっと私…。(奥へ行くこうとする)

哲人 あー！

蓮 え？

哲人 どこ行くんですか？

蓮 …正市さんを。

哲人 あ、そうですか。…便所行きます？

蓮 はい？

康子 すいませんね。

蓮 …いえ。(奥へ)

蓮 ガタンゴトン…。

哲人 (見送って、思い出したように) …えー！

美智 哲人、うるさい。

哲人 だってびっくりだよ。正仁くん、聞いた？

正仁 …。(笑う)

正仁 また携帯の着信音。

正仁 (見て) …。

康子 (美智のお腹を見て) 赤ちゃんがいるんですか？お嬢さんは。

美智 え、お嬢さん？…あ、はい。

康子 (哲人に) あなたの？

哲人 え、僕ですか？

康子 はい。

美智 (同時に) 違います。

哲人 …早くない？みっちゃん。

正仁、携帯を捨てるようにソファへ。

美智 正くん…。正仁さんの子供です。

康子 あら。正ちゃんの子？

美智 はい。

正仁 (笑って) …ってか、誰？あの人。

康子 …蓮さんですか？

正仁 ここに住んでる？

康子 ええ。

正仁 なんで？結婚したってことですか？

康子 それはしてないみたいですよ。

正仁 (笑って) いやいや…。もつとなんで？

康子 とてもいい方ですよ。正市も男やもめで働いてないですから。蓮さんがいてくれ

て何かと助かるでしょうしね。

正仁 え？…何て云いました？

康子 とてもいい方なんです。

正仁 働いてない？

康子 ええ、正市は。

正仁 どういうこと？

康子 私は詳しいことは分からないんですけど。地震もありましたしね、

正仁 …。(笑う)

能美正市、手に霧吹きを持ち、のれんをくぐって入ってくる。

続いて、蓮。

ガタガタ、ガタガタ…。

康子 あ、お邪魔していますよ。

正市 うん。

康子 今ね、正ちゃんと話していたんですよ。

正市 あ、そう。あつたかくなった。

康子 本当にね。そろそろ梅雨だなんて思わないくらい。

哲人 …。(所在なく壁のポスターを見ている)

正市 (哲人に) あ、あれ、何だったかな？

哲人 …はい？

正市 時計台から何メートル落って落っこちた。

哲人 え？…っと、俺に云ってますか？

正市 実際に自分で落っこちたやつ。スタントマン使わないで。

哲人 えーと…。ジャッキーチェンの話ですかね。僕はそっちの話は…。

正市 あれは？大怪我したやつ。木に飛び移った時に手がすべっちゃって。頭の骨が割れちゃった。

哲人 え？頭の骨が割れたんですか！？

蓮 (正市に) サンダーアームでしょ。

正市 そうだ、龍兄虎弟だ。

蓮 さっきのはプロジェクトA。

正市 あ、そうか。そうだった。

哲人 (蓮に) 詳しいんですね。

蓮 …お母さんが好きだったから。私も。

哲人 へえ。

正仁、立ち上がって出ていこうとする。

哲人 あー！

一同、驚く。

正仁 何だよ。

哲人 どこ行くの？

正仁 便所行くだけだよ。

哲人 あ、ダメ。

正仁 え？

哲人 …ごめん、ちよっとお腹が。

正仁 お前、行ったじゃねえか。

哲人 ダメ。ごめん。(奥へ)

正仁 …。

蓮 みなさん、コーヒーでも。

正市 悪いね、蓮。

蓮 うん、全然。(奥へ)

正市、やり取りの間に縁側から庭に下りて、霧吹きで鉢植えに水をかける。

ガタンゴトン…。

美智 (追うように庭に下り) …お父さん、あの、私…。

正市 …さつき会いましたね。

美智 ご挨拶しかできひんくて。あの…。

正市 はい。

美智 (何か云おうとするが) …勝俣美智です。

正市 はい、さつき。

美智 …ですよ。

康子 お子さんがいるんですって、お腹に。

美智 そうなんです。

康子 正ちゃんの子供なんですって。  
正市 ほー。(霧吹きを続けている)  
美智 ……  
康子 正ちゃんたち、宮城にボランテアに行ってたんですってよ。  
美智 あ、はい。私は飛び飛びやったんですけど、正仁さんは1年くらい。  
正市 ボランテア。  
正仁 (笑って) ……あのさ、何やってんの？  
正市 ……ん？  
正仁 (近づいて) 何してんの？  
正市 水をやってる。  
正仁 見りや分かるよ。  
正市 そうか。  
正仁 仕事は？  
正市 していない。クビってやつかな。店も厳しくなったから。そうなたら古い人間からだよ。もう1年近くになる。  
正仁 (笑って) ……何を他人ごとみたいに…。あの女は誰？  
正市 ……あの女？  
正仁 今出てった。  
正市 蓮っていうんだ。  
正仁 誰が名前訊いたんだよ。……だいたいいくつ離れてんの？  
正市 いくつって歳か？(頭で数える風) ……30くらいじゃないかな。だいぶんおじさんになった。  
正仁 だから他人ごとみたいに云うなって。なんでここにいの？  
正市 ここに住んでる。  
正仁 だからなんで？  
正市 家族だからな。  
正仁 ……は？  
正市 蓮は家族だよ、俺の。  
正仁 (笑って) 家族だ？  
正市 うん。  
正仁 結婚してないんじゃないの？  
正市 うん。  
正仁 家族って何だよ。  
正市 ……家族って何だ？  
正仁 (笑って) 俺が訊いてんだよ。  
正市 ……子供は家族か？……親は家族か？



正仁 …。

正市 なんでここにいる？なんで来た？（自らに問うているようにも聞こえる）

美智 すいません。私たちが行くところがないんで正くんが連れてきてくれたんです。本  
当にすいません。

台所から、やかんのお湯が沸いた。ピーという音。

正市 （ふと、正仁に改めて向き直り）…ああ久しぶりだったな。どれくらいになる？

正仁 …10年ちよつと。

正市 ずいぶん経った。強くなったんだな。

正仁 …。

正市 強くなるって云ってたから。

正仁 どんな気持ちなの？働いてないって。屈辱？クビになって。

美智 …すいません。

正市 なんで彼女が謝ってるんだ？

正仁 （笑って）覚えてる？ふんって笑ったよな？俺が学校やめるって云ったらさ。好

きにしろって云って、でもふんって笑ったよ。お前に何ができるって顔してさ。

そうだったか。それは悪いことしたんだな。

正仁 だからさ…。

康子 人と人には縁というものがありますから。正市と蓮さんには縁があったんですよ。

正仁 ってか、おばさんも何なんっすか？

康子 はい？

正仁 さっきから何？その喋り方。そんなんじゃないっただしよ、昔は。酒ばっか飲ん

で。いっつもくだまいて。

康子 …。

ガタガタ、ガタガタ…。

正仁 いつも喧嘩ばっかしてたでしょ、おじさんと。

康子 お酒はやめました。今は飲まないんですよ。

奥で電話が鳴る。

美智 正くんやめなつて。

正仁 ちよつと黙ってるって。

美智 え。

正仁 関係ないだろ。こっちの話なんだよ。

美智 …。

電話の音が切れる。誰かが出た様子。

と、同時にまた携帯の着信音。

正仁 なんだよ…。（手に取って音を切る）

正仁、そのまま奥へ行きかけるが、思い直して庭へ降り、出ていこうとする。

美智 どこ行くの？

正仁 ……しよんべん。(出ていく)

正市、霧吹きを続けている。

ガタンゴトン…。

美智、力が抜けたように縁側に腰を下ろす。

正市 姉さん、今日は？

康子 あ、そう。これを持ってきたんです。(持っている新聞を差し出す)

正市 ああ。

蓮、のれんをくぐって入ってくる。

蓮 正市さん。

正市 ん。

蓮 電話が。

正市 電話？俺に？

蓮 石井さんって方。

正市 石井…。

蓮 うん。何とかって…。あ、ちょっと名前が聞き取れなかったの。バカね。

正市 いるって云った？

蓮 うん。

正市 そう…。

蓮 いけなかった？

正市 いや。…姉さん、ごめん。

康子 いいんですよ。

正市、縁側を上がって奥へ。

蓮 (見回して)…あれ？正仁さんは。

康子 ちよつと出ていったんです。

蓮 そうですか。

康子 すぐ戻ると思いますよ。家族なんですから。

蓮 …。(美智に)あの…。

美智 ……はい？

蓮 コーヒー持ってきましたね。

美智 ……いいです、私は。

蓮 (お腹を見て)あ、そうよね。でもあんまり神経質にならなくても大丈夫なのよ。

美智 ……え？

蓮 ごめんなさい。一日一杯とか、200mlくらいなら影響はないの。もし好きな

のに我慢してストレスになっちゃうくらいなら。

美智 ……。

康子 蓮さん、考えてくれました？日曜日。

蓮 あ、はい。…まだ。

康子 「顔を出すだけでいいんですよ。みなさんのお話を聞いているだけでいいんです。三村さん、お話ししたことありますよね？とても感じのいい。

蓮 はい、すごく。

哲人、のれんから顔を出し、中の様子を窺う。

康子 今度は三村さんのお宅なんです、すぐそのの。三村さんもこの前ご主人を亡くされたでしょ。それで自分から私に連絡くださって。

美智、立ち上がって部屋へ入っていき、椅子に腰を下ろす。

康子 (新聞を差し出し) これ読んできてくださるだけでいいですから。とてもいいことが書いてあるんですよ。きっと蓮さんの心にも響くと思うんです。

蓮 …。(受け取る)

美智、康子たちの話にいたたまれず、立ち上がって奥へ行こうとする。

哲人 (入ってきて) え、どこ行くの？

美智 何？トイレやけど。

哲人 あ、ダメ。

美智 何を云うてるの？

哲人 ヤバいから。やめといたほうがいいから。

美智 …。

蓮と康子、そのやり取りを聞いている。

哲人 (三人の視線に追いつめられ) 水洗がぶっ壊れて流れないの、うんこ！

美智 …。

哲人 ちよつと行ってくる。(再び奥へ)

美智、怪訝そうに奥へ。

ガタンゴトン…。

と、相本理紗、大きなバッグを持って庭に入ってくる。

理紗 能美正市さん、いますか？

蓮 …あ、はい。今奥に。

理紗 (康子を見て)…おばさん？

康子 …。

理紗 理紗です。

康子 あら。理紗ちゃん？

正市、戻ってくる。

理紗 ご無沙汰してます。

康子 あらあら。何ですか、今日は。理紗ちゃんまで。

理紗 はい？

正市 (理紗を見て) ……

理紗 (正市に気づき) ……いたんですか？  
いた。

正市 分かります？私。

…。

理紗 なんで電話出ないんですか？

正市 電話？したのか？

理紗 ごめんなさい。私…。

正市 (バッグを見て) ……その荷物は？

…ここにいてもいいですか？迷惑だと思っただけど。

…。

理紗 お母さんが倒れました。一週間前に。ずっと意識がないです。…もう無理かもしれない。

まるで時間が止まったかのよう。

夕方の陽が強まり、燃えさかる火が静かに人々を包むようにも見える。

溶暗。